

次の旅はどこに泊まる? 大自然、アート、ウェルビーイング……注目の最新宿を徹底紹介!

Discover Japan - TRAVEL

2022年10月号増刊

2022-2023

個性あふれる
客室・料理・アメニティ
を大解剖!

ニッポンの 一流ホテル リゾート&名宿



波
癒
namyu
the place



IRAPHSUI
MIYAKO OKINAWA



ろ 霞

FIELD SUITE SPA
HEADQUARTERS



由布院



ポロト

SHIGIRA RESORT
SEVEN MILES



FUFU
HAKONE JAPAN

箱根・翠松園
HAKONE SUISHOEN

木の間の月
KONO MA NO TSUKI

せかいえ
SEKAI E

ROKU KYOTO

THE THOUSAND
KYOTO

THE VILLA
& BARREL LOUNGE

松之山温泉
酒の宿 玉城屋



THE BLOSSOM
KYOTO

NOHGA HOTEL



ホテル雅叙園東京
HOTEL GAIJOEN TOKYO

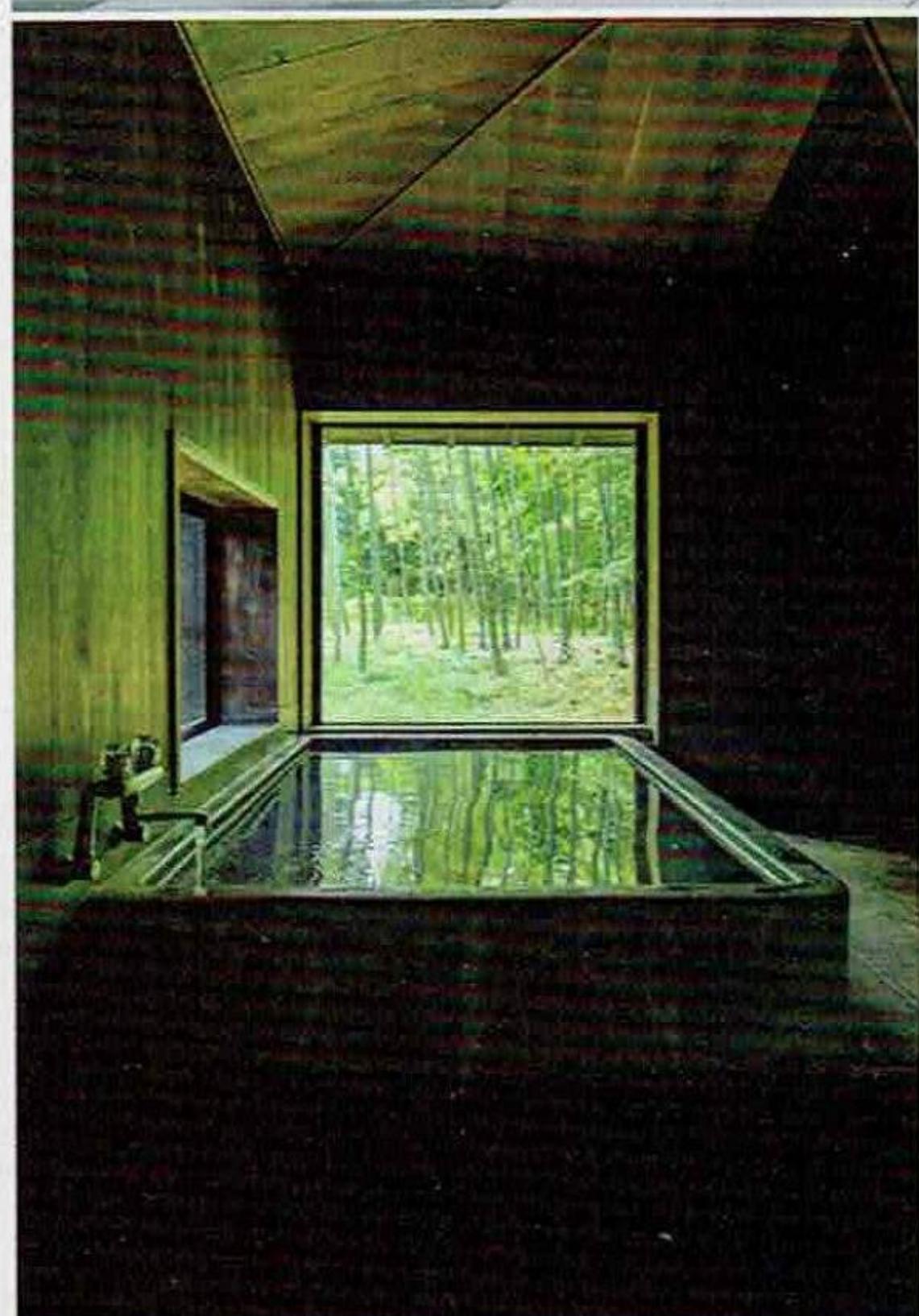
Mitsui Garden Hotel Toyosu PREMIER

sequence | MIYASHITA PARK
THE CELESTINE
TOKYO YOSHI

え湯
孫九郎
元湯
孫九郎

ひなの宿
ちとせ

シグチ/ THE SHINMONZEN / 直島旅館 ろ霞 / Snow Peak FIELD SUITE SPA HEADQUARTERS / 界 由布院 / 界 ポロト / シギラ
セブンマイルズリゾート / ティダムーン / 波癒-namyu the place / イラフ SUI ラグジュアリーコレクションホテル 沖縄宮古 / ホテルグラン
フェニックス奥志賀 / 星のや軽井沢 / シャレーアイビー定山渓 / SOWER / The Villa & Barrel Lounge / 酒の宿 玉城屋 / ふふ 箱根 /
箱根・翠松園 / ふふ 熱海 / 木の間の月 / ATAMI せかいえ / ふふ 河口湖 / ふふ 日光 / ROKU KYOTO / THE THOUSAND KYOTO /
ダーワ・悠洛 京都 / ギャリア・二条城 京都 / THE BLOSSOM KYOTO / NOHGA HOTEL / 庭のホテル 東京 / ホテル雅叙園東京 /
三井ガーデンホテル豊洲プレミア / ホテル ザ セレスティン東京芝 / sequence MIYASHITA PARK / 元湯 孫九郎 / ひなの宿 ちとせ



撮影=中島光行 (Nakajima Mitsuyuki)
出典=「その時間の差し出し方1—湯宿さか本」(すなば刊)

主人の美意識と信念が
行き届いている稀有な宿

湯宿さか本

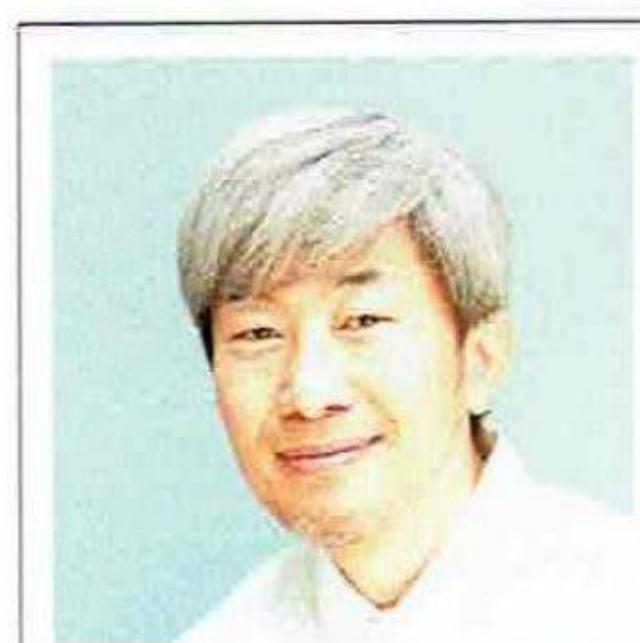
先代の「坂本旅館」を引き継ぎ、1989年に「湯宿さか本」として開業。サービスの行き届いた日本の宿とは真逆の、何もない贅沢が味わえる宿

住所: 石川県珠洲市
上戸町寺社 15-47
Tel: 0768-82-0584
料金: 1泊2食付1万8000円~
(税・サ込、1~2月は休業)
※10月~年末は料金変動。
詳細は要問い合わせ

GUIDE ブックディレクター

05

幅 允孝 さん



YOSHITAKA HABA

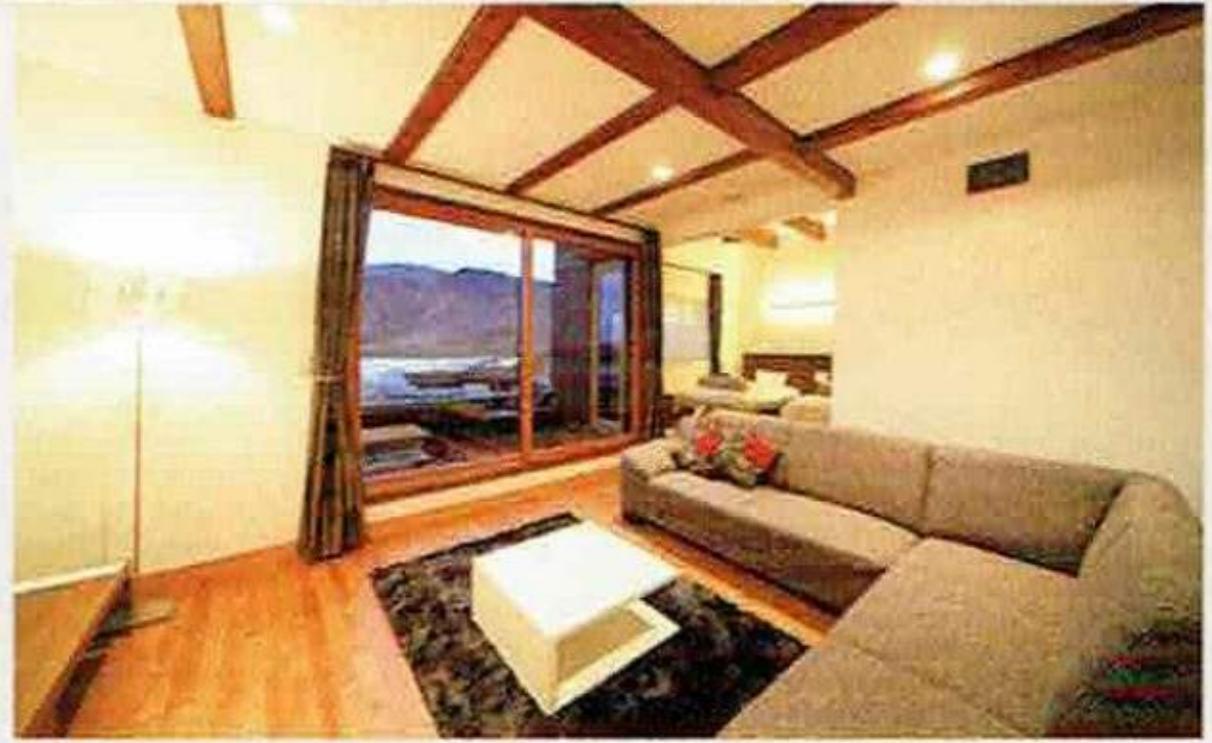
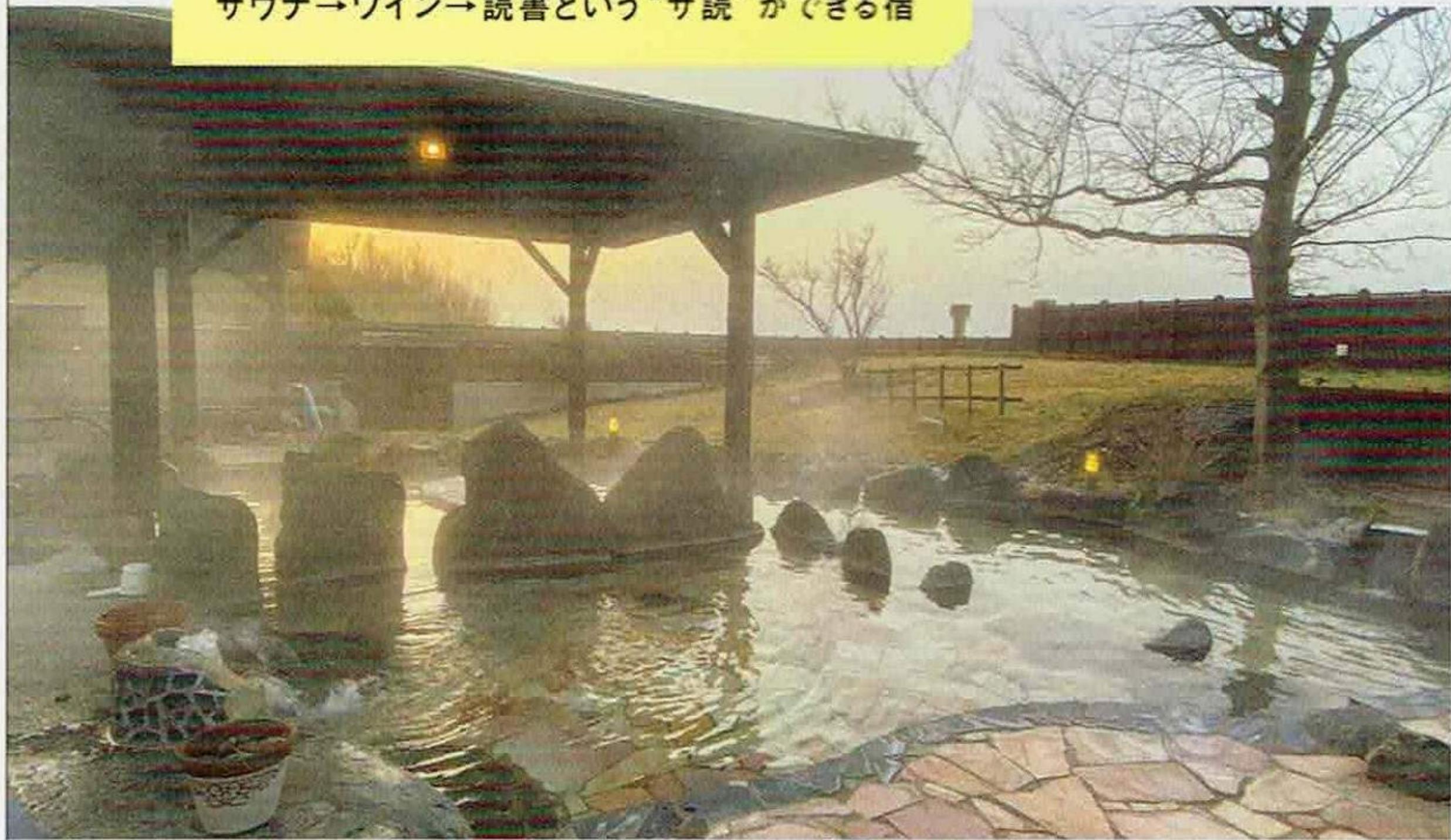
BACH (バッハ) 代表。人と本の距離を縮めるため、公共図書館や病院などさまざまな場所でライブラリーの制作をしている。安藤忠雄氏の建築による「こども本の森 中之島」ではクリエイティブ・ディレクションを担当

普段とは違う回転数で
頭の中をゆるめる

ブックディレクターとして各地の公共図書館や病院図書館、ホテルライブラリーなどをいつも転々としているという幅允孝さん。普段の仕事はスピード感が求められるので、オフのときは自然と頭の回転数が遅くなるような環境が必要だという。「プライベートで宿泊する際は、時間の流れがゆるやかになる宿を好んで選びます。奥能登の『湯宿さか本』は、まさに理想の宿。お風呂もトイレも共同で、室内にはテレビも冷房設備もなく、スタッフを呼んでも来てもられない。『至らない尽くせない宿』なのですが、宿を構成するすべての要素の端々に、主人である坂本新一郎さんの美意識というか、坂本さん自身の血が通っているのです。しかも、これみよがしに見せつけるのではなく、ゲストがまたたく気づかないくらいの何でもなさで、いつの間にか力を抜いた状態へと誘ってくれるので。空間もしつらえも、料理もすべて染みます。竹林の中にあるお風呂も素晴らしい、光を抑えた薄暗さも落ち着きます。秋から冬は囲炉裏の前で炭をいじりながらの読書も格別です。それでいうと、ちょうど1年前、2泊3日で泊まつた『ガントウ』も印象的でした。瀬戸内海をめぐる客船で、建築家の堀部安嗣氏による空間が本当に落ち着

ブックディレクターとして各地の公共図書館や病院図書館、ホテルライブラリーなどをいつも転々としているという幅允孝さん。普段の仕事はスピード感が求められるので、オフのときは自然と頭の回転数が遅くなるような環境が必要だという。「プライベートで宿泊する際は、時間の流れがゆるやかになる宿を好んで選びます。奥能登の『湯宿さか本』は、まさに理想の宿。お風呂もトイレも共同で、室内にはテレビも冷房設備もなく、スタッフを呼んでも来てもられない。『至らない尽くせない宿』なのですが、宿を構成するすべての要素の端々に、主人である坂本新一郎さんの美意識というか、坂本さん自身の血が通っているのです。しかも、これみよがしに見せつけるのではなく、ゲストがまたたく気づかないくらいの何でもなさで、いつの間にか力を抜いた状態へと誘ってくれるので。空間もしつらえも、料理もすべて染みます。竹林の中にあるお風呂も素晴らしい、光を抑えた薄暗さも落ち着きます。秋から冬は囲炉裏の前で炭をいじりながらの読書も格別です。それでいうと、ちょうど1年前、2泊3日で泊まつた『ガントウ』も印象的でした。瀬戸内海をめぐる客船で、建築家の堀部安嗣氏による空間が本当に落ち着

サウナ→ワイン→読書という“サ読”ができる宿



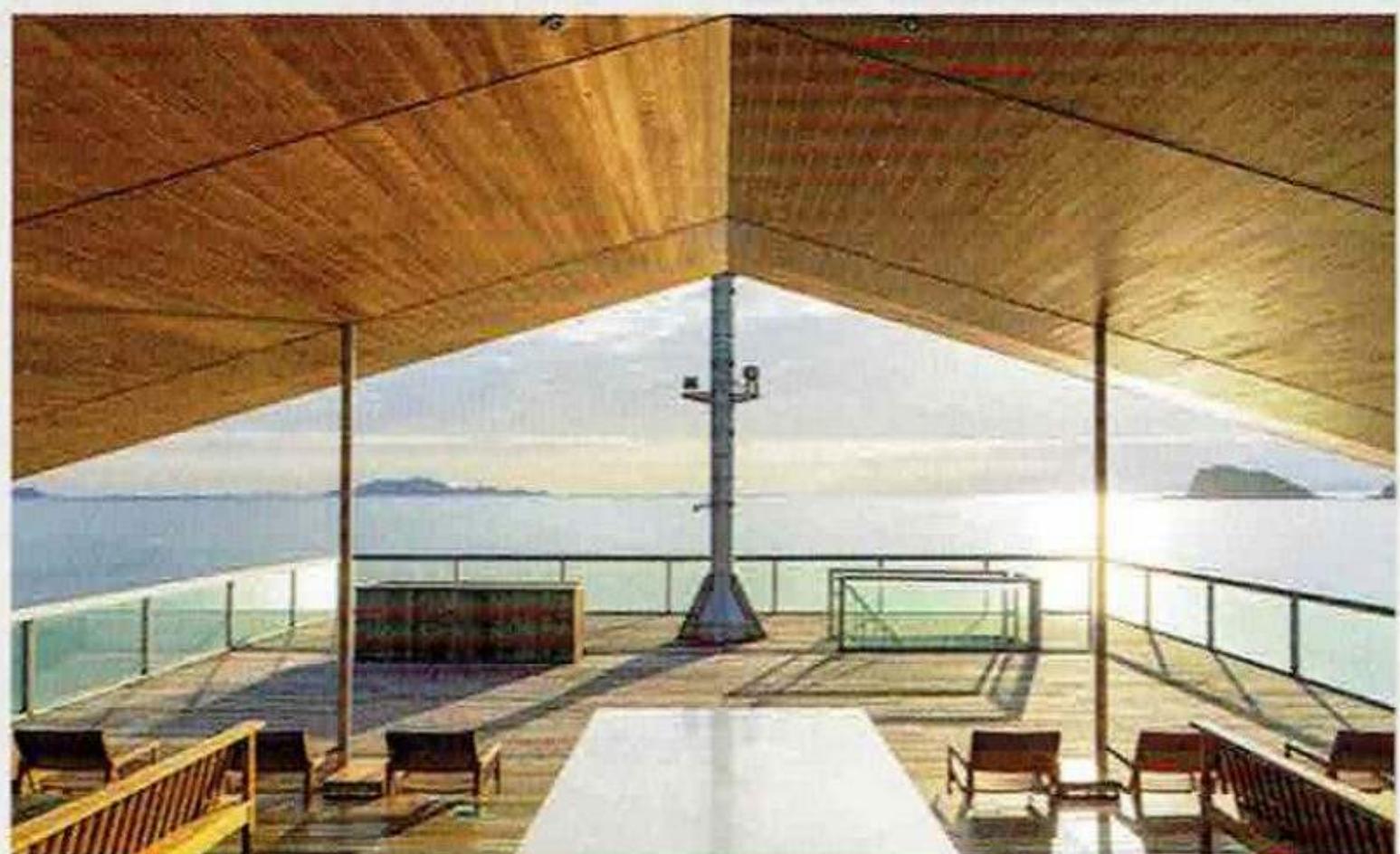
カーブドッヂ ヴィネスパ

角田浜の豊かな自然に囲まれた、ワイナリー内にあるスパリゾート。自家製ワインと地元の食材を使った料理、温泉でとことんリラックスしたい

住所：新潟県新潟市西蒲区角田浜1661

Tel: 0256-77-2226

料金：1泊2食付1万8000円～(税・サ込)



船の進む「遅さ」
が心地よい究極の
旅館でした

guntū
(ガンツウ)

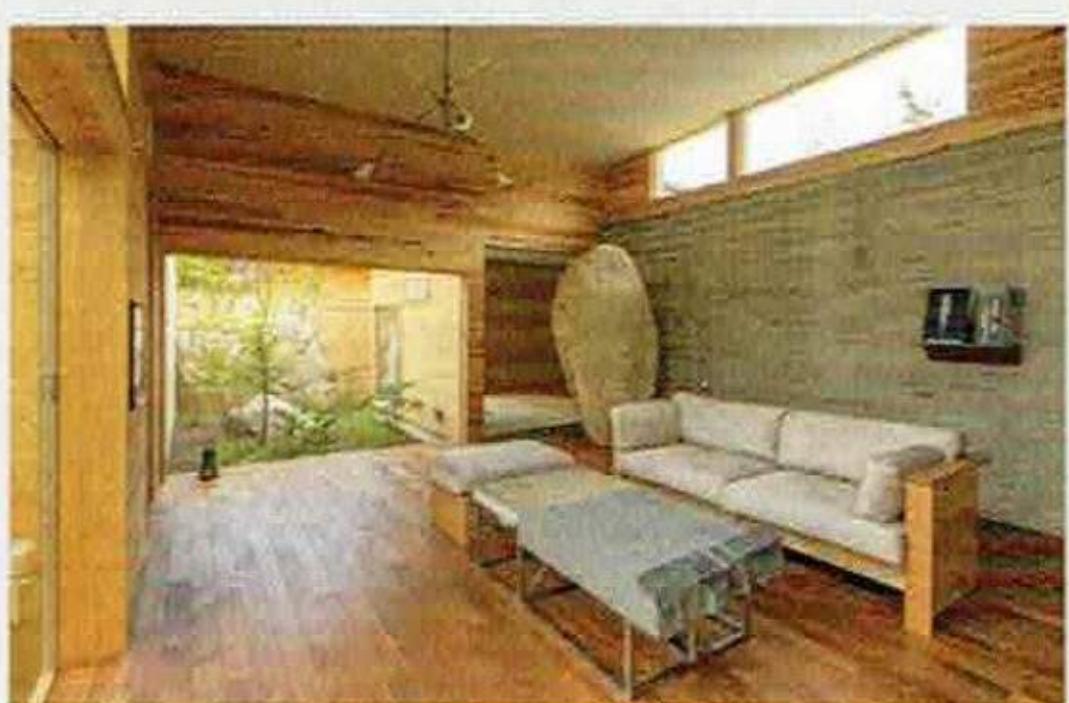
瀬戸内海に浮かぶ小さな宿。客室は19室。瀬戸内海を西へ東へと眺めながら、旬の味覚を味わい、幻想的な風景を心ゆくまで堪能できる

母港：ペラビスタマリーナ
(広島県尾道市浦崎町
1364-6)

Tel: 0120-489-321



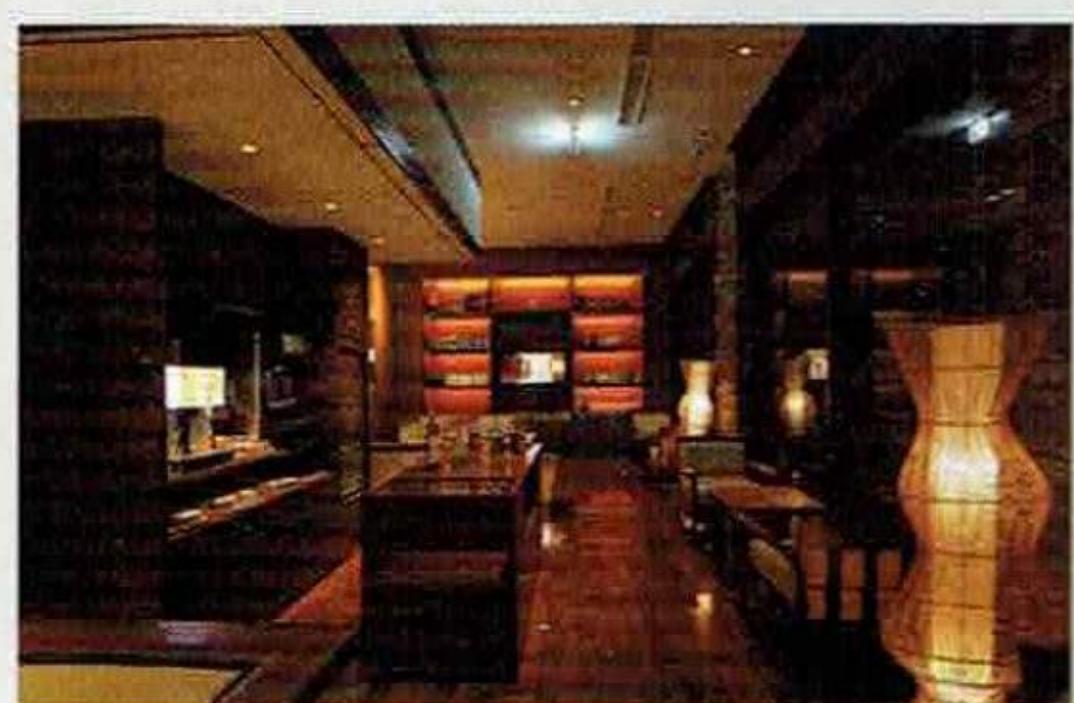
この宿づくりにかかわりました!



湯の山 素粹居

住所：三重県三重郡菰野町菰野 4842-1

Tel: 059-390-0068 料金：1泊2食付
5万7000円～(税・サ込)



sankara hotel&spa 屋久島

住所：鹿児島県熊毛郡屋久島町麦生 553

Tel: 0800-800-6007 料金：1泊2食付
8万2000円～(税・サ込)

く。立派な切妻の屋根にはじまり、船内の床や天井には檜やサワラなど国産材が贅沢に使われていて、思わず裸足で歩きたくなります。客室の海側に面したソファコーナーの天井などはあえて低く設計されている部分もあり、海上の開放感と落差もよい。まさに動く日本旅館です。サウナでたっぷり汗をかいた後に水風呂に浸かり、甲板で瀬戸内の風を浴びながらの外気浴も癖になります。どれだけ飲食してもエクストラチャージがかか

らない点にも、驚きました。ガンツウは船の速度がとてもゆっくりなので、島々が目の前をのんびり流れています。そのまま眺めていると、私の気持ちも徐々にゆるやかになっていくのです」

2022年3月にリニューアルした新潟の「カーブドッヂヴィネスパ」もまた違った意味でゆつたりできる宿だという。「改装時にブックラウンジを担当したのですが、打ち合わせを兼ねて何度も通っているうちに虜になつていま

した。スパリゾートというだけあって、いつもお客様で賑わつて、そのワイワイした感じが逆に集中力を高めてくれます。ブドウ畠に囲まれた、のどかなシチュエーションの中でお風呂に浸かり、サウナ→水風呂→外気浴後に、この地でできたワインを浸透圧に任せ飲み、あとはひたすら読書。自分では勝手に「サ読」と呼んでいるのですが、よく飲み・読み・休む、そんなひとときも最高です」

屋久島のオーベルジュ型リゾー

トホテル「sankara hotel&spa 屋久島」は、2022年2月末にライブラリーラウンジのリニューアルを幅さんが担当。「地場に関連のある本を多く取り揃えており、気軽に屋久島の風土や文化を理解することができるゆるやかなラウンジです。関連書といえば、三重の『湯の山 素粹居』の仕事も充実していました。この施設は12棟のヴィラからなる宿泊施設なので、土や木など、棟によつてそれぞれマテリアルのテーマが異なる

のが特徴。宿のディレクションをした内田鋼一さんと対話する気持ちでライブラリーをつくりました」。続けて幅さんはこう語る。「宿にブックコーナーを設ける上で心掛けているのは、普段であれば手に取らないような本を『手に取ろう』と思えるような余白をつくること。私自身、宿に滞在中はひたすら読書、昼寝、食べる、飲む、お風呂を堪能します。普段なかなかできない『何もしない』を楽しむことが、宿泊の醍醐味ですから」。